

令和4年度 第1回小樽市総合教育会議			
開催日時 令和4年11月4日(金) 13:30~15:23		開催場所 小樽市庁舎別館3階第1委員会室	
出席者			
(構成員)	小樽市	市長 迫 俊哉	
	小樽市教育委員会	教育長 林 秀樹 委員 小澤 倭文夫 委員 荒田 純司 委員 常見 幸司 委員 黒田 仁美	
(事務局等)	小樽市	副市長 小山 秀昭 総務部長 佐藤 靖久 総務部企画政策室長 齊藤 繁幸 企画政策室主幹 島谷 和大	小樽市教育委員会 教育部長 薄井 洋仁 教育部次長 鈴木 健介 学校教育支援室長 大山 倫生 学校教育支援主幹 菊野 幸治 学校教育支援主幹 谷口 剛 学校教育支援主幹 吉田 健一 施設管理課長 柿岡 佳憲 教育総務課長 森田 裕規
	※ 傍聴者数1名		
協議・調整事項			
<ol style="list-style-type: none"> 1 子どもたちのスポーツ振興について 2 学校でのいじめ対策 3 人口減少対策<教育環境の整備> <ul style="list-style-type: none"> ・校務支援システムの全校導入について ・学校図書館の環境整備について ・ふるさと教育とキャリア教育について ・学校トイレ洋式化について 			

— 会議内容 —

企画政策室長	<p>それでは定刻となりましたので、令和4年度第1回小樽市総合教育会議を開催いたします。本日は傍聴の方が1名いらしております。それでは、この会議を招集いたしました迫市長より挨拶を申し上げます。</p>
市長	<p>今日はお忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。また、教育委員の皆様には、日頃から、本市の教育行政の推進にお力添えをいただいております。感謝申し上げたいというふうに思います。また新型コロナ</p>

ウイルスの感染がまたここに来て拡大傾向にありまして、学級閉鎖も相次いでいるというふうに聞いておりますけれども、この新型コロナウイルスに向き合います、もう2年数ヶ月たちますけれども、長期間にわたる中で、御対応に御尽力いただいておりますことにも感謝申し上げたいというふうに思います。私といたしましては、今の小樽市教育委員会が進めているICT化の推進、それから、ふるさと教育の推進ですとか、また今小樽市が、文化庁が進める日本遺産の取組を進めておりますので、それに合わせて文化財行政の振興にも鋭意取り組んでいただいているということについて、本当に感謝しております。また、御存知のように、この8月26日から私の二期目がスタートいたしましたけれども、少し1期目を振り返ってみますと、いくつかやはり、選挙に臨むに当たりまして教育に関わる公約も掲げさせていただきましたし、その状況ですとか、公約に掲げなくても教育に関わる施策というか、事業というか、そういったものにも取り組んで参りましたので、少しお話をさせていただければと思います。

一つにはやはり先生方の長時間労働ということを念頭に置きまして、外部の専門的な知識をお持ちになった人材の登用には心がけて参りました。これは部活動の指導員もそうですし、学校図書館の司書もそうですし、あるいはスクールカウンセラーもそうだったかと思っておりますけれども、十分ではありませんけれども、まず1期目としては着手をさせていただいたというふうに考えております。また教育環境の向上につきましても、まだまだこれも課題があるというふうに認識しておりますけれども、学校の耐震化の推進は、着実に進めさせていただいて、残すところあと桂岡小学校だけですかね。ここまで進めることができたというふうに思っております。また適正配置計画につきましても、凍結をさせていただいておりますけれども、私としてやっぱり地域における学校の役割というものも、これは、避難所の問題ですとかいろいろあるんですけれども、コミュニティの形成の場であったりとかってということもありまして、凍結をさせていただいております。そういった中で、存置を決めました松ヶ枝中学校については、西陵中学校との統合という予定もありましたけれども、これを凍結させていただいて、まずは老朽化が進んだ松ヶ枝中学校の教育環境の改善というのは急務だというふうに考えまして、旧最上小学校に移転をいたしたところでありまして。また忍路地区に学校を残すことにつきましても、小中併置校として決定いただいたことには大変感謝をいたしております。また来週あたりからオープンキャンパスも実施いただけるということにつきましても、本当に私も期待をしておりますし、こういった教育の取組としっかりと連携をしながら、特色を生かしながら地域振興にもつなげていければというふうに思っております。また施設整備の面から申し上げますと、市立図書館の改修は多額の寄付もありましたけれども、それに合わせて市立図書館の改修を行いましたし、現在ちょっと遅れ気味ではあ

りますけれども、旧日本郵船小樽支店の改修も進めさせていただいております。また基本構想の策定中ではありますけれども、総合体育館の建設についても決定をさせていただいたところでもあります。また、学校への新聞配置も実施をさせていただきましたし、また試験的ではありますけれども、これも先生方の長時間労働を念頭に置きまして、校務支援システムを試験的に導入させていただいております。これについては後程お話もあるということで伺っておりますので、少し協議をさせていただければと思っております。

2期目の公約の柱は、皆さん御存知のように、もう何がなくともとにかく人口減少対策これに尽きるというふうに思っております。この人口減少対策を実現していく上で、重点公約を五つ掲げたのですが、その二つについては教育関係のものでございまして、1点目は子どもの学習環境の改善、それから子どもの感性を育み、可能性を引き出す環境づくりということで、重点公約五つのうち二つは教育関係を充てさせていただいております。

現在、来年度以降の人口対策に向けた施策づくりを人口戦略推進会議というものを開催しながら協議を進めさせていただいている、まさにその最中でもあります。教育部からは学習環境の改善の観点から、私の公約の中の学習環境の改善の観点から、一つには子どもの相談体制の強化、それから学校図書館の整備充実、それから中学校における部活動改革、それから学校のトイレの洋式化、まだあったと思いますけどもこういったところが、来年度以降の人口減少対策の中の学習環境の改善という観点から、提案をいただいているところでございます。これから予算議論に入って参りたいというふうに思っておりますけれども、学校図書館の整備充実につきましては、これは9月の第3回定例会でも議員の方から指摘をされましたけれども、蔵書数の部分であります。学校図書館の蔵書数につきましては、文部科学省が示す標準というのはありますけれども、表の標準の70%未満の学校というのが、市内には半数以上あるというふうに聞いておりますので、この問題についてはしっかり注意を払っていかなければいけないなというふうに思っております。

それから、スポーツの関係で言いますと、文部科学省から休日における部活動の段階的な地域移行ということが示されておりますけれども、これとあわせましてやはり少子化により、特に団体スポーツなのでしょうけれども、やりたいスポーツをやりたい子どもができないという、こういったことはかねてより懸念を私としてもしていたところでもあります。今教育部の方から、拠点校方式という方式を示されておりますけれども、この拠点校方式であったとしても、先生方への負担ですとか、あるいは移動の問題というのは残されておりますので、これをどうやって解消していくかということについては、必要なテーマになってくるのではないかなというふうに思っております。

それからいじめと不登校の問題でありますけれども、これはもう、ここ最近、全国のデータが示されて新聞にも出ておりましたけれども、一つには長引

くコロナ禍にあって、全国的にも増加しているというような論調にはなっておりません。この問題についても引き続き注意をしていかなければいけないというふうに思っております。先ほど言いました来年度以降に向けた施策の一つとして、教育部の方から相談体制の強化のための対応を求められておりますけれども、やはりこのいじめと不登校の問題につきましても、一つには相談体制の強化というのは重要な視点だとは思いますが、もう一つはやはり未然防止の取組という視点もあるでしょうし、やはり旭川の事案なんかを見ますと、第三者委員会から学校だとか、市教委の対応が問われている中で、重大事案が発生したときの対応ということも、やっぱりしっかり念頭に置いてこのいじめと不登校の問題を考えていかなければいけないのかなというふうに思っているところでございます。

いずれにいたしましても、まだまだ教育行政の推進に当たりまして、課題はたくさんあるというふうに認識をしておりますので、この今日の総合教育会議の中で、委員の皆さんから本当に積極的に御意見をいただきまして、財政の問題もありますけれども、そういった中で優先順位を考えながら計画的に、なかなかいっぺんにいろんな事を進めていくという財政状況にはありませんので、計画的に進めていければというふうに思っておりますので、よろしくお願ひしたいというふうに思います。私からは以上でございます。

企画政策室長

それでは早速ですが、小樽市総合教育会議の運営に関する要綱第3条の規定に基づき、以降の進捗を市長にお願いしたいと思います。なお、全体の会議時間につきましては、1時間程度を予定しております。それでは市長、よろしくお願ひいたします。

市長

やっぱり部活の問題はちょっと気になっていまして、先ほども少し触れましたけど、今教育委員会の方では、拠点校で進めたいという説明を私どもも受けています。先般資料もいただきまして先生方にアンケートをとったようですが、やりたいスポーツは子どもたちがしっかりやれる環境をどうつくっていくかという一方で、やっぱり先生方としては、教員の負担というのは引き続き残るだろうなという不安の声も聞かれますし、拠点校だとやっぱり、そこまで行かなきゃなりませんので、移動の問題をどう解消していくのかというような御指摘も受けております。そういった課題を解決しながら、これから中学生の部活動を、どうやって考えていくのかというのは、私としても一つ皆さんのお話、御意見を伺いたいなというふうに思っております。それともう一つは総合体育館の、これは子どもたちのスポーツ振興という視点から申し上げますと、教育委員会の方では、今年度中に、プールを併設した新しい総合体育館の構想を今、作っております。その中でも、親子で安心して利用できる機能、それから子どもが運動に親しみ、楽しく体を動かすことが

できる機能ということで少し子どもを意識した機能も、できれば入れていきたいなというふうに思っておりますので、そういった中で子どもたちのスポーツ振興を図っていききたいというふうに思っております。特に部活動の観点から、教育委員の皆様から御意見をいただければと、お考えをいただければなというふうに思いますので、よろしくお願ひしたいというふうに思っております。これが1点目です。特に団体スポーツだと思ふのですね、スポーツだけに限らずもちろん文化系のクラブもそうなのですけども、ちょっとスポーツを例示させていただきました。

小澤委員

よろしいでしょうか。まず、現状、私どもの受けとめの方からお話させていただきたいと思ひます。市内の中学校の運動系の部活動の競技種目とか、参加する生徒の数は減少傾向にあることは確かです。ちょっとデータを見ますと、例えば、今年度は中学校1校当たりの実施部活動、何部くらいが子どもたちにこう提示されているかという、4.5部なのです。文化系も入れると6.7部なのですけども、スポーツだけでは4.5。ここ数年を見るとやはり開設されるのがどんどん減ってきて、5年前、平成29年は7.5部でしたので、5年間で40%減っていると、そういう状況なのです。しかしもうちょっと参加を希望する生徒の方を見ると、運動系と文化系とを合わせた加入率が一校平均で見ると68.6%、こういう状態なのですが、そのうち運動系は73.3%で、大体5年ほどずっとこの70%台が継続されているのです。参加する生徒の方は、部活動の種類は減っているのですけども、参加したいという子どもは、ずっと維持されているように受けとめていました。ですから、何らかの形で選択しながら、例えば野球をやりたいのだけれども、ないからこういう部活動、スポーツ活動やろうというふうにして、子どもたちのその潜在的といひましようか、部活動に入りたいという願ひは、強くあるのだらうかと、そう受けとめています。ですから、こういうスポーツ振興の観点から、そしてそのことはまた違う面で見ると生徒の体力、健康維持の観点、こういうものを含めて、部活動の参加率を高めていく取組が必要であると考えています。それで、市長の方から先ほどお話があった、そのこととあわせて学校の働き方改革を含めた部活動との関わりということも大きな課題になっていると思ひますので、そのことも含めて、来年度から、そういう状況の中で、新たな部活動の構築を進めていかなければならないなという現状を受けとめて考えたところです。

現状はそんなところなのですが、働き方改革の方も、これまた1ステップ進んだように思ふのですが、休日には、先生が教科の指導をしないようにというのと同様に、休日に先生は部活動の指導はしないという方向で案が出されています。これを令和5年度から順に、つまりは来年度から、進めていくというスケジュール表も出されています。そんな中でじゃあどうするかという

ことで、子どもとしては、まずは、小樽の子どもたちのことを第1に考えて、生徒が希望する部活動に加わることができる、そういう部活の体制を作ろうと。併せてそのときに、働き方改革のことも考えていかなきゃならないのではないかと、そのようなことで今考えておりました。

ではどうするかということで、先ほどお話いただきました拠点校方式という方式を取り入れてはどうかということが、来年度に向けた教育委員会の方針として出しています。部活動はもう皆さん御存知だと思いますけども、学校で単独で何々部を作っていました。それがなかなかそれだけではできなくなってきたので、複数の学校の生徒で合同で部活動を作ってやっという。そうやっというも、結局部活動の開設できる数は、もう5年前に比べると40%ぐらい減っている。今までの方式プラス何か新たなことを取り組まなければならないなど考えました。

それで、今、検討していますが、いわゆるその拠点校方式というのは、私の解釈ですけれども、今まで行われてきた合同部活動の方式に加えて、さらに複数校での構築に幅を広げて、市内全体あるいは市内を幾つかのブロックに分け、その地域の中に一つの学校を例えばこの学校は野球の部活動を行う学校として、拠点校として指定する。平日はその学校の生徒とその部活動に入りたいと考えた生徒も部活動の時にはその拠点校に移動して合同で部活動を行うということで、生徒の選択を広げられるのではないかなと、そういうことを今考えております。課題としては先ほど触れていただきましたように、じゃあ移動の手段をどうするのかと。それから、それぞれのその指導体制を学校単位であったものを、その他の学校の生徒も預かって指導することになるので、そういう指導体制をどうするのかという課題をまず洗い出して、現状の子どもの選択肢を広げて、スポーツに親しむ機会を広げようという点では、この拠点校方式を検討しなければならないというふうに考えております。

具体的には、今年から始めて、来年度の拠点校方式の導入を目指して、教育委員会が主導して、生徒の部活動希望を集約し、そしてどんな希望があるのかを集約して、それぞれの地域性等を考慮して準備を進めながら、拠点校の指定については、例えば校長会と、あるいは部の指導に当たる部活動顧問との調整を図りながら、準備が整った部活から順次、拠点校方式を導入していくことが良いのではないかなと考えています。特にそうなると、今、なかなか部活動として集まらない、実施できていない野球とかサッカーとか、そういう部活動についても、子どもたちの選択肢を広げる方法になるのではないかなと思っています。

それから、これは子どもたちの選択を広げるという観点で考えてございますが、もう一方では、先ほどありました、いわゆる学校の働き方改革推進の方のこともありますが、働き方改革の面では、先ほど言いましたように、休日に

先生が部活動の指導を行わないという指針が示されています。そうになると、そこに向かうまでのまず第1弾目として、学校での部活動を拠点校方式で行い、それを休日の指導に向けてどう橋渡しをしていくかということが、来年度以降の課題になるかなと思いつながり進めておりました。両方の観点から、拠点校方式が妥当であり可能ではないかなと思っております。

また、そういうふうに進めていきますと、今までは部活動が学校を中心にやられていましたけども、特に今後もう3年ぐらいを目途にしまして、学校において部活動を指導する者は、学校の教員ではない、例えば、スポーツクラブですとか、スポーツ少年団ですとか、そういうところの方が指導者に当たることとなりますので、その会場をどうするかというようなことも、課題になってくると思います。そういう点で転換していくことを考えると、部活動をその地域に移行していくということも含めて、地域の部活動に今後なってきますので、いろんなスポーツ施設を総合体育館を含めまして、今あるものも含めて、そういうスポーツ施設の整備充実もあわせて課題になっていくのかというふうにも考えております。

そんな二つのことを大きな観点として考えながら、繰り返しになりますが、まず私どもとしては、子どもたちの選択の幅を広げたい。そしてスポーツに親しむことを目指していきたい。合わせてそれを地域との連携の中でやっていくことで、教員の働き方改革も進めていくことができるというふうに考えているのが現状のところですので、御協議いただければと思います。

市長 ありがとうございます。これは拠点校方式になっても、国の指針でいう先生方が休日に部活動を指導しないというのは残るのですよね。

教育長 今国で言っているのは、もし教職員が土日に働くとなると、今までとは違った身分というか形で働き方を考える。つまり、教員ではなくて、指導員、部活動指導員みたいな身分に代わって指導していくというようなことで、服務を変えてというようなことも考えているようですけども、一番理想は、やっぱり地域にいる指導員の方にやっていただくというのが、一番いい方法だというのが国の考え方なのです。

市長 ベースは拠点校なのでしょう。小樽の場合は拠点校方式でやっていくと。

教育長 そうです。何らかの形で拠点校に集めて、そこでスポーツ団体が主導になるのか、それとも地域の部活動の指導員がそれを担うのか、そういうような形になるのですよね。

市	長	だから土日だけは教員以外、あるいは教員以外の身分の人たちが指導するという形なのですね。	
教	育	長	来年度からそういうふうにすると言っていますけど、すぐ制度的にすぐできるかどうかというのはまた難しいところではあるのですけれども。だから平日の部活動は、教員が暫定的に担うという形にはなりません。
市	長	そうですね。いや私がやっぱりいつも心配しているのは、小学生だったら結構いろんな地域の人たちが野球を教えたり、サッカーをしたりして、いろんなクラブチームみたいのがある。だけど中学校に行った途端に、指導者もいなくてそれができなくなってしまう。部活がなくてできない。一方、中学生レベルのクラブチームだとやっぱり家庭の負担というのはかなり、例えば野球のシニアチームなんか行ったらもう遠征費だとかすごくお金がかかってということになって、それこそやりたい子が出られなくなってしまうようなことがあるので、何とかうまく小学校の時に地域の皆さんが一生懸命こうやってくれたことを中学校でも、子どもたちができるような環境ができればいいなというふうには思うのですよね。	
教	育	長	そうですね。だから小学校の少年団も今、一つの学校でなかなかできなくなってきて、いろんな学校の子どもたちが一緒に少年団に入ってやっっていくというような形になっていますので、それをどういうふうに分けていくかというところなのですけど、求めるレベルが違くと入っていけない子どもたちもいる。例えば野球のシニアチームがあったとしても、そこまでやっけない子どもたちもいるので、だから、どうやってそのスポーツの機会を提供してあげられるかというのは、非常に難しい問題ではあるのですけど、受け皿をどうやって作っていくかということになるのだと思います。
市	長	そうですね。地域の指導者の皆さんたちとの連携というのは必要というか重要になってきますよね。スポーツをやってきた方は、結構地域にいますよね。いるとは思うのですよね。そういう人たちが何とか子どもたちの指導に当たってくれたらいいなというふうに思うのです。	
教	育	長	だから、スポーツ協会の加盟団体の方で非常に理解を示してくれて応援するよって言ってくださっている方もいるので、そういう方々をうまく指導員として、関わってもらってやっけるといいう形になると思うのですね。だから今の少年団の延長というのももちろんありかなというふうに思っているのです。小学生が入っている少年団、その子たちがそのまま中学校の部活動として、やっていただくというのは将来的には出てくるというふうに思います

		<p>けど。そこら辺が負担が重くなるので、どういうふうに教育委員会として応援していけるかどうかというところになってくると。今まで小学校は、特段、予算だとかそういうので面倒を見ているわけではないですよ。ただ、場所だとか、小学校のグラウンドだとかそういうのを提供しているぐらいなのです。</p>	
市	長	<p>そうですね。これは何となくスポーツのイメージはあるのですが、その文化部でも同じ問題はやっぱりあるのですかね。</p>	
教	育	長	<p>例えば今、紋別で先行的な事例をやっているのですが、例えば、お花だとかお茶だとか、そういうような方を、例えば、公民館みたいなどころに集めて、そこに各学校から習いたい子が来る、華道部というのを作って、市内から子どもたちを集めて、そこで指導するというそういうやり方をしているところもありますので、そこら辺はそういう言い方だとか、ただ、小樽みたく、すごく範囲が広いところは、どこか三つぐらいに分けてやるとか、そういうようなことも考えていかなければならないのかなというところですよ。</p>
市	長	<p>西陵中学校で大林先生がお琴を教えに行ったのは、あれは授業の一環でしたか。</p>	
教	育	長	<p>そうです。日本音楽の授業ですね。だからそういう延長の中で、部活動としてやってそこに拠点校じゃないですけど、子どもたちが集まって、お琴の部活動としてやるというのは考えられるのかなと。</p>
市	長	<p>邦楽とかお花とか、先生方が教えるというのはちょっと難しいですよ。</p>	
教	育	長	<p>そうですね。なかなか難しいのだと思うのですよ。</p>
市	長	<p>でも検討いただいていますので、幾つか課題はあると思いますけれども、何とか今、何年か3年ぐらいかけてやろうということであればその推移もありますので。</p>	
教	育	長	<p>そうですね。国が3年間かけて集中対策期間として、各自治体に行動を求めていますので、それに乗って私どももやっていく必要があるのかなと。</p>
市	長	<p>あと他の委員の方で御発言ありますか、スポーツの関係で。なければ次の議題に行きますか。いじめはトータルで増えているのですよ。</p>	

教 育 長

この間の調査結果速報値で国のデータが新聞報道分、多分そうですね、出たと思うのですけれども。小樽もかなりいじめの件数が多いというか増えている。増えているそのとらえ方というのが非常に難しく、北海道で1,000人当たりでいうと61人なのです。全国で62人、小樽市で165人ですから断トツで多いのですけど、この多いことがどうなのかというところがあって、そのとらえ方で大きく違って来るといふふうに思っています。

常 見 委 員

この件に関して私から説明します。冒頭でお話があったのですが、全国的にもいじめ件数というのは増えていてということなので、去年と比べても9万8,000件以上増えているというのは事実としてあり、全国的にもありますし、小樽市の中でも、令和元年度には一番のピークもあるのですが、昨年ちょっと減っている。生活環境の変化も関係している部分もあるんですけど、やはり令和3年度になってみると、2年度から3年度はやっぱり増えてきてるということですよ。全国平均に比べれば例えば小樽は小学校でも約3倍、中学校においてもやはり全国平均を上回った件数のいじめの認知を行っている。これはいじめがあったということにとらえている、その認知の幅の広さによるのだと思うのです。これは積極的に問題行動をいじめというふうに認知していくかどうかというところでの立場で、大分数字が変わってくると思います。そこが小樽市としては、教育委員会それから各学校の考え方としては、やはりいじめはいずれもどこでも誰にでも起こり得るといふことは、私なんかも何回もその話は聞いております。

そういったことで早期に発見、対応するということを目指すためにそういう認知数が増えてきたのだというふうにとらえております。冒頭のお話でもありました、その未然防止というところでも大事だと思うのですけれど、やはり取組としてはその未然防止とそれから早期発見、早期対応、この三つがとて大事だというふうにして、未然防止ということは考え方としてはやはり啓蒙活動を行って、いじめをどういうふうにとらえるかということが大事で、特にいじめという言葉だけにとらえてしまうとなかなか幅も狭くなりますし、状況によっては立場が違えばいじめではなくてもいじめになり得るのだよというようなことも含めての啓蒙活動というのはとても大事になるのだと思うのです。

その辺に関しては年2回、6、7月は子どもたちの安全安心を守るキャンペーン、11月から12月はいじめ防止キャンペーンとして行ったり、児童生徒にはその時に合わせて年2回はいじめのアンケートの実施、それから児童生徒向けの資料の配布だとか、いじめ防止サミットだとかの開催を行っておりますし、教職員向けには、いじめ問題対策、情報モラル対策研修会や、特に文部科学省のいじめ自殺等対策専門官による研修なんかも行っているところです。

やはり大事な教育相談体制というのがありますから、小樽市教育研究所による教育相談窓口の設置と、やっぱり小中学校にスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーを派遣して相談を受け付けていくようにしているところです。もう学校単位でのいじめ防止標語の作成だとか、児童会とか生徒会がみずから主体となって活動を行ったりとか、人権教室、情報モラル教室などが開催されています。もちろん学校だよりや学校のホームページなんかでもいろいろと情報発信をしているところです。

あと、なかなか難しいのがネットいじめですね。やはり学校の中にも、なかなか見えにくいので、むしろ放課後に受けやすいというところもありますから、随時、そういったいじめに対してのチェックという意味でのネットパトロールなども行っているところです。だから未然防止としてはそういう方法を取りながら早期発見、やっぱり児童生徒にはいじめをしないさせない許さないということを十分に理解してもらうということを行いながら、先ほど申し上げたように、いじめという言葉だけをキーワードにしないで、嫌な気分になった、からかわれたというような事例もいじめとして認知していく。それが冒頭の話で出てきたいじめの認知件数というのが、平成29年度から非常に小樽市は増えているのですけど、いじめという言葉、いじめられたかどうかという表現ではなくて、嫌な思いをした、からかわれた、そういう気分になったということをとらえていくということで、件数の増加に繋がっているというふうに思います。

あとはいじめを疑う事例が生じた場合に、発見した主には教職員になると思うのですが、その方が1人で判断せずに、校内にあるいじめ防止対策組織に速やかに連絡して、組織全体で迅速に対応していくということをとにかく考えていただいている。やっぱり立場の違う視点を変えて検討することがとても大事だというふうに思われます。そういうようなことで、深刻な事態いわゆる重大事案になっていくのを何とか未然に防ぎたいというふうにも思っております。早期対応と今度はその解決の問題になると思うのですが、やはりいじめ防止対策組織というのが中心になりますが、状況によっては教育委員会いじめの早期対応チームの迅速な協力ですとかもあっていじめを受けた児童生徒の保護者への支援、それからいじめを行った児童生徒への指導と保護者への助言ですとか、周りの生徒児童への働きかけなんかもどんどん行っていくというようなことを行って、スクールカウンセラーなんかの派遣も随時行っていくということで対応しています。そういったことで、とにかく早く対応していく。早く見つけて早く対応していくということを重点的に考えているところです。

市

長

そもそもこの総合教育会議が、いじめの重大案件から端を発して、市長部局としっかり協議するということができた会議ではありますけれども。だか

	<p>らどう認知するかというところと言うと、小樽の場合は、割とこの芽のうちから摘んでいこうという対応になっているというわけですね。</p> <p>それをいじめ防止の基本方針というのを作って、そこで必ず徹底していくのだというところをやっている結果が数値として現れているというふうには押さえていただければいいのかなと思っています。だから、重くなる前にもう芽を潰してしまうという、そういうやり方を徹底をしていくということなのですが、ネットのいじめのように、学校が関わらない中で友達同士でいじめが起きたりということも十分想定される。こっちの方が重くなる可能性があるのですよね。某市の事件もそういうところも一部あったところなのですけれど、それをどうやって解決していくか。保護者も悩んでいる。子どもも悩んでいる。そこをどうやってカウンセリングしていくかをきちっとしていかないと、やはりどんどんどんどん重くなっていった重大事態に発展していく形になっていく。そういうふうにならないように、いろんな手だてをしていく必要があるのだろうというところなのです。それで今、市教委で取っているのはスクールカウンセラー、それから家庭的に厳しい御家庭についてはスクールソーシャルワーカーというそういう方々が教員とあわせて支援に当たっている、そういうような図式になるのかなというふうに思っています、そこはやっぱり手を抜かないで、やる必要があるのかなというふうに思います。教育委員会ではそういう考え方でいます。</p>
<p>市 長</p>	<p>来年度に向けて、教育委員会から要望があるスクールカウンセラーの増員だとか、そのスクールソーシャルワーカーの増員の要望も出ていますけれども、この方々はどちらかという問題が起きたときに動いていくようなイメージはあるのですが、未然防止の観点からもこのカウンセラーだとか、ソーシャルワーカーの役割というのはあると思うのですが、そこはどういうふうに考えたらいいですかね。</p>
<p>常 見 委 員</p>	<p>よろしいですか。もちろん事案が生じた段階でのいじめに対してのカウンセリングというのも大事だと思うのです。そういう児童生徒、保護者、それだけではなくて、実際にはやはりそれ以前の問題であったりとか、不登校の問題にも繋がりがねないところもありますので、そういう意味でカウンセリングというのは幅が広い。そういう意味では、教職員の先生方と管理職の方ももちろんですけど、そういう方々の協力もそうですけども逆にそこで先生自身のカウンセリングというの必要なケースも出てくるかもしれません。そんなことも考えると、やはりカウンセリングの幅というのはかなり広いと思っています。いじめの話じゃないカウンセリングから始まって、それがいじめの話に繋がっていったって出てくるなんていうこともまたもちろんあります。</p>

		<p>そして見ると相談件数というのはやはりすごく増えているのですよね。ですから、数字をもらってびっくりしましたけど、平成元年で1,159回だったのが、令和2年では1,592回に増え、3年度になると、2,172回という非常にすごい回数になっている。そうすると、問題なのはやっぱりスクールカウンセラーの方々の時間内での勤務対応が大分厳しくなっているというふうに伺ってまして、勤務時間以外にも相談業務を実施しているようなところもあるのですけれども、それでもなおかつ要望にだんだん対応できなくなっているような状況になりつつあるのですよね。それで、今年度も増員していただいて、もう大変助かっているのですが、まだ必要性が増えてきているのが現状であります。</p>	
市	長	<p>ネットパトロールは前からありましたよね。</p>	
教	育	長	<p>これはその中に入って行って、リサーチをして、そういうのが起きてないかどうかというパトロールですので、なかなかパトロール自体は、その出たものを抑えていくというやり方ですけど、その前の段階の情報モラル教育の方が非常に大切なのかなと。そうならないためのものをどうやっていくか、そこはいじめと直結する問題があるので、そのモラル教育の方もやっていかないと、今、もう誰でもスマホを持って、いろいろ検索できる時代、送信できる時代になっているということで、その辺の指導も非常に大切なので、そこは学校で中心に動いてもらってはいるのですが、うちの方でアドバイザーを送り込んで、いろいろ指導はもちろんしていますけれど、ネット社会はかなりスピード感が出てきてまして、気をつけないとならない、非常に大きな課題なのかなというふうに思っています。</p>
市	長	<p>ここから今度不登校に繋がるケースもやっぱり結構ありますよね。</p>	
教	育	長	<p>ネットでの先ほど言ったようにいじめみたいな関わり方、友達でそこで仲間外れにできてしまったりとか、グループでラインを組んでいるのだけど、その中での動きだとか、そういうので結構重くなるケースがあるのですね。</p>
市	長	<p>不登校の原因の中のいじめの割合ってのはかなり高いものですか。もちろん家庭の問題とかいろいろあって不登校には繋がっていると思うのだけど。</p>	
学校教育支援室 谷口主幹		<p>不登校の中で一番多いのは、無気力・不安が小樽市は多くて、いじめによるっていうのは、実はそんなに多くはないですけども、友人関係、親子の関わり方、生活リズムの乱れという形です。</p>	

市長	なかなか担任の先生だけで解決するのはもう難しいですね。
教育長	そうですね。学校も担任だけに任せないで、職員全体で関わるということをお願いをしているのです。それでもやっぱり家庭で起きた事案とか家庭同士だとか、子ども同士の校外での動きだとかとなってくると、学校も非常に手を出しづらくなって、そこも、結果としては、学校でのトラブルになってしまいかねないので、その対応も学校がいろいろと間に入って対応していかなくちゃならないというところが現実としてあると。だからそういう問題で、いろいろ相談になるケースが非常に増えてきて、保護者同士での対応というのは、そういう部分でトラブルというのはかなりあります。
小澤委員	市長が先ほど話した未然防止で、すでに常見委員の方からもお話がありましたけど、小樽の学校で、非常に効果的な取組だなと私が感じたのは、ある中学校では生徒会の活動で、自分たちでこういうものがいじめだということを物語化して、それを生徒に示して、いじめってこうなんだということを自分たちの中で取組をして、いじめとは何かということをお互いに子どもたち同士が学び合う、これが未然防止に非常にいい。だからそういう面では、学校で子どもたちのネットワークができてくるというそれが一つすぐれた取組かなと受けとめています。教員の方でも、1人ではちょっと無理なので、一つはカウンセラーは、教員とは違う視点を持っていますので、その繋がりができてくるとすごく力強い、未然防止になってくるのですよね。もう随分前ですけど、著名な先生ですが、その書物の中で、発言したい子は小指が動くというのですよね。見えるわけがないですよね。きっとその人は例えで言っているのです。その表情や何かから自分は感じ取れるのでしょうか。その先生が、例えば子どもが話して聞こえませんかって言うと、私はもう一度言いなさいって言うんですが、私には聞こえました、あなたはよく聞きなさい、というふうに切り返すのです。だからそういう視点を持っている教員が気づいたことをカウンセラーの方と共有して、カウンセラーは専門的な理論をお持ちだと思いますので、そういうネットワークが学校の中で、教員、カウンセラーでできていくと、またこれも強い予防になるのではないかなと考えます。こういうことでカウンセラーを増やしていただくと、非常に先生方にとっては心強い。そして、相談できるということが一般化してきますので、重要なことだなと感じました。
市長	ありがとうございます。いや、十分検討させていただきます。そんな口で言うほど簡単じゃないですね、いろんな難しさがありますので。また、いろいろこのいじめの問題については議論させていただきたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

あとは、教育委員会の皆さんから幾つか議題があるというふうに聞いておりますので、順次御発言いただければと思います。一つ目は校務支援システムの導入について。

小澤委員 私の方から。先行して6校入れていただきまして、大変ありがとうございました。

市長 今6校。

教育長 小学校から中学校と同じエスカレーターで行く学校を3校ずつ。

小澤委員 私も小中それぞれちょっと、先生にお話を聞いたのですけれども、総体的に言うとは非常にいいということでした。課題はシステムに慣れて熟達して使うのには、研修その他時間はかかるけども、使えるようになると非常にいいという点で好評でした。具体のところでは、道の発表では。

市長 他の地域ではもうどんどん導入が進んでいるものですか。

小澤委員 道教委で発表しているのを見ますと、後志で3町村ぐらいいまだ入っていないところがありましたけれど、多くは入ってしまっていて、業務軽減効果と教員の声が出ていましたが、削減効果というのは、1年間で116.9時間です。どんなものかという、これは小樽でも共通しますが、朝の打ち合わせ、これをネット上でやるようになったので、それを持たなくてもいい、ディスプレイを見て確認するだけで終わりますから。そしてその時間を子どもたちと接する時間にすることができているとか、会議の資料を、例えば30部印刷するとか、そういうのもネット上で全部やるので、その印刷時間も省くことができるようになっていくとか、そういう点で、すごく役に立っている、有用だということでした。道の調査では、そういうことによる業務軽減時間が年間で17時間です。それから、出席簿の作成に関わる業務のことも言っていました。出席簿はネットに入力するとそれが出席簿はだいたい1ヶ月ごとに、誰が何日と出欠数を集計していくのです。そして通知表に入れるのには学期ごとに何日出席となる。それが全部自動で計算してくれる。集計されて、それを通知表と連動するようにできるので、非常にいいと。時によってはそれを検索できるので、この子の様子はというと遅刻が何日あるとか、何日休んでいるとかというのもすぐ、もう瞬時に検索できるので、そういう意味でも非常に良いという話でした。それと関連して通知表とか、指導要録、これが結構学期末、年度末に教員は時間がかかるものなんですけども、例えば通知表の作成も昔は印刷所で印刷してもらい、手書きで私も書いていました。

今はもうネット上でやって印刷するというふうになっています。例えばそれも書式を決めてしまうと、学年、学級、名前、それから出席状況、成績等もうそのままデータを反映して入れられる。直接先生から聞いたのでは、通信欄などは、その担任の先生が書いたものを、一応学校でチェックして保護者に渡すのですが、それは今までだと、例えば丁寧な学校はノートに書いて、それを見て、それでいいよ、ここはこうしたほうがいいねというふうにしていたのですが、それも全部ネット上でできると。そんなことで、非常に有用に使っていますし、これも通知表に関連する業務軽減時間というのは、道の集約ですけど、通年で48時間。指導要録にもそれぞれ入れなきゃならないものですが、それが全部データが反映して出るので、それでも非常に有用だったとのことでした。特に年度末は、多忙な時期になるので、そういう点で、おそらく今後やっていくと効果は一層はっきりしていくのではないかと。道の調査はそれで約33時間となっていました。

そういう諸帳簿のことの他に、全体的な点でのメリットは、各学校それぞれ独自の方法で、例えばデータの管理をしたり様式を作ったりしていたのが、それによって、特に教頭先生ですと、異動すると前にやっていた文書管理の方法と新たな学校の文書管理方法が違っていると、それで随分時間を引き継ぎ等に要したようすけれども、それがシステムが入ると、もう共有しているので、同じシステムで入っているから、そのことについての細かな打ち合わせとか修正をしなくてもいいというようなこともあります。それから、小学校の校長先生のお話で、これがもし全市に入ったら、授業の進め方等をA小学校からB小学校に、あるいはA中からB中に異動しても同じ書式で、学校それぞれの工夫はあるでしょうけど、基本的には同じベースで仕事ができるので、年度初めの仕事に非常に有用だろうと、そんなお話も聞きました。そして、結局そういう時間、朝の時間ですとか、それから諸帳簿の集計などをする時間、その部分が縮減されるので、それを子どもと向き合っていく時間に使えると。子どもをよく見る時間だから、例えばいじめの対策に使う時間も増えるというようなことも聞いて、そういう面で教育の充実に繋がるので非常に有用です。それから、教育研究の面でも、学習指導案を作る場合、それを今までですと、全部作って印刷して先生方に配って、それで意見交換の会を開いてというふうにしていた。実際会うことも大事なわけけれども、ある新任の先生は、それを校務支援システムに入れる。先生方がそれぞれ見てくれて、こういうところはいいけどこういうところはこういうふうに考えたらいよいよというような個別の先生方の繋がりも随分密になってきたというようなことも伺いました。そんな点で時間の短縮という面もありますが、先生方の仕事の面での何と申しますか、より本質的なところに向く時間が多く保障されるようになるのではないかなと。そんな点で、私の行ったところは、入った六校のうちの

幾つかですけども、ぜひ市内共通にしてもらおうといいと、そんな話をしていました。

それで私も改めて聞いていましたら、例えば、書類を作るには手書きで書くかキーボードで打つか、その時間そのものはそれぞれにかかるのだと思います。でもそれを目的に応じて集計する、月ごとに集計する、計算する。学期ごとにする、そういうものが全部自動化されるので、それはミスも少ないし、時間短縮に繋がるから、いわゆる校務支援システムを入れることで、例えば電卓で計算するような時間が縮減されるので、そういう面が非常に有用だということをお話していました。あとは、システムの機能をきちっと理解して、習得するまでには時間がかかる。ですけども、それができてしまえばすべて自動化して、全部リンクされてくるので、非常に合理化、効率化には有用であるというような話がありましたので、今後、先生方の働き方は、目的は子どもとの繋がりを多くして、子どもと接し学ぶ力を高めていくためにも、ぜひ、この後導入を進めていただきたいなど、そう感じております。以上です。

市長　これは試行何年目でしたか。

教育長　2年目です。今ちょうど検証しているところで、その検証結果を踏まえて、何とか全校に向けて入れていきたいという話を内部ではしています。

教育部次長　導入は今年の1月です。

教育長　今年の1月からですね。そして年度を変えて、今、もう1年試行している。

小澤委員　このシステムには、生徒のいいところを見つけてそこにデータを入れるという機能もあるのですが、中学校の先生方はいろんなケースで指導に当たりますから、自分で感じた子どものよさをそこに入力していくと、担任の先生を含めてみんなが見られる。そうすると、生徒にも、君、この前こういうふうにしたよねというような、そういう資料として非常に役立ちます。

市長　情報は共有されているということですね、なるほど。単なる業務の改善とか効率化だけじゃなくて、そういった意味での情報が共有されて、生徒との関係といったものにも使われているということなのですね。

小澤委員　そういう意味では情報を一人一人が使えなくても、全員で共有できるシステムになっているのです。ただ、課題はやはりそこに慣れるまでには少し時間がかかるけれどもということはあって、それぞれ必要な書式を作るには、ぜひ支援がほしいというような声も聞かれましたけれども、内容的には、非常に高い評価でした。

市長 あとは導入した場合のランニングコストですね。

教育長 そうですね。どちらかというと、学校のDX化というのですかね、その一貫みたいな形で、ペーパーレス化もこれで進めているので。

市長 そういうところも含めて出していただければ。紙の枚数だとか、時間もそうだけそれをちょっと後で整理しといてほしい。これは予算議論になってくる。ありがとうございます。これはもう、先生方の働き方改革に寄与すると思いますね。

次は、学校図書館。これは先ほど言いましたように、蔵書の問題も含めて、読書推進計画もありますので進めていかなければならないのですけれども。議会の指摘はやっぱり蔵書問題が指摘されていましたので、それだけじゃなくて、やっぱり司書さんがきちっと配置されることによって子どもたちの読書環境が変わって、子どもたちももっと興味深く本を読んでもくれるし図書館にも来てくれるというところはあると思うんですけれども。学校図書館について、御意見があるということですのでお願いいたします。

黒田委員 はい。去年の総合教育会議でもこの図書館について、司書さんの重要性とかやっぱり蔵書の数についてお話しさせていただいたのですけれども、まず司書さんについて、去年に比べ今年また1名増やしていただき本当にありがとうございます。そして私は保護者目線のことで申し訳ないのですが、私の娘が通う稲穂小学校にも今年初めて司書さんがいらしてくれて、西陵中学校との兼務なので週に2度来校していただくことになったんですが、その効果についてちょっとお伝えできればなと思いました。稲穂小学校では私も図書ボランティアとして活動しているので、図書室の出入り、すごく頻繁にさせてもらうんですけれども、図書室の環境が司書さんが入ることによって本当によくなったなっていう実感がすごくあります。まず図書室の本がやっぱりすごく綺麗に整理されているんですよ。この図書の乱れはやっぱり生徒たちが出して片付けることができなくなる。汚いと出して片付けるのもやっぱり汚くなるんですって。だから心の乱れというか、この学校生活に対する乱れが図書に現れるんだよっていう話を昔聞いたことがあったので、今の稲穂小の図書室は本当に綺麗に図書が並べているだけですごいなあとは思っているんですけれども、その中でも破損本とか修理本がたまってないんですよ。来ていただいて図書司書さんがそれも直してくださるので、子どもたちが学校にある図書室でどの本も読めるっていう状態にあるんです。あとは、その時々でこう紹介したい本、何かイベントに関連した本とか、興味を引くだろうなっていう本が、やっぱり子どもたちの手に取りやすいところにディ

スプレーされているので、手に取りやすい環境が整っているっていうことがやっぱりすごく大事なことだなあっていうふうに私は図書室に出入りして感じていました。今まで私たち図書ボランティアも読み聞かせだけじゃなくて、図書室の環境をよくしたいなと思い季節の飾り付けだとか、やっぱり修理本、破損本の手入れをしたり、いろんな事務作業があったんですけども、コロナ禍で図書室への出入りがストップしてしまったときに、やっぱりいろんなことが滞ってできなくなってしまった時期があったんですね。結果として子どもたちが図書を借りたいのに、借りられないっていう期間ができたんですとか、そういうことが今はなくなったので、司書さんが来てくれて環境を整えてくれていることが本当にありがたいっていうのが一つ。あとは子どもたちの話を聞いていると、週に2度いらしてくれるんですけど、司書さんが来る曜日をきちんと子どもたちがみんな把握しているんですけど、というのは司書さんに対してすごく親しみを感じているっていうのがあるので、図書室に行くと読みたい本もありますけど司書さんがいてくれるっていうこと自体が、子どもたちにとっては温かみのある場所になっているというか、学校の中で教室以外のよき居場所になっているんじゃないかなっていう雰囲気はすごくあるので、やっぱり司書さんの数を増やしていただいでその温かみのある図書室が小樽全校に広がればいいなあとというふうには思っています。

あわせて市長の方からも最初にありましたけれども、図書の蔵書数、適正蔵書数が足りてないという学校がやはりたくさんありまして、子どもたちにとって今必要な本、今読みたいなっていう本がそろっていることが大事だと思うので、必ずしも蔵書数が100%というか、古い本ばかりであるという必要はないと思うのです。これもやっぱり司書さんの仕事に関わってまして、今司書さんが来てくださって全部バーコードで打ち込んでくださって、今やっと多分データがそろった、どの学校もデータがそろったという状態で、これから、じゃあ処分する本は何なのか、残す本は何なのか、新規で今子どもたちに必要な本は何なのかというところに今来ていると思いますので、やっぱり新規の購入を続けていってほしいと思いますし、あとはこの学校間の格差、一方では100%以上の学校があったり、40%から50%しかない学校があったりっていうこの学校間の格差はやっぱり問題なんじゃないかなっていうふうには理解しています。この学校間の格差をなくす、やっぱり図書室の蔵書数の充実って学習環境に本当に直結することだと思いますし、あとは子どもたちの生活リズムというか、小樽市の子どもたちはとにかくスマホを触っている時間が長いと言われてるところを、小樽の市立図書館までは、仮に行けない、かといって自分で本屋さんも行けない、でも図書室に行ったときに、今読みたい必要だと思う本がある、そこにアクセスできるっていうのはやっぱりすごく大事なことだと思いますので、ぜひ図書の更新です

		とかその購入も全校進めていっていただきたいなというふうに思っています。以上です。
市	長	これは、黒田委員がお話されたように、僕も資料をもらっているのだけど、学校間の格差って何で生じるの。100%っていうところと、40%未満だったっけ。どうして生じるのだろうか。
学校教育支援室 吉田主幹		学校は、大分本の方も整備はされているところではあるのですが、学校独自で地域から寄付をいただいたり、そういったことで本が急に増えているというところがあります。
教 育	長	学校の規模に応じて配分しているので、やっぱり 1 人あたりはそんなに変わらなくてもというのはあるのかもしれないですね。基準が学校に応じてこう段階的にはなっているのですが、その差があまりないというのものもあるのではなかろうかなと。
市	長	黒田委員がおっしゃるように、蔵書数を満たすということより、本当に読みたい方があるかどうかで、背表紙がボロボロになった本も入れて蔵書 100%とかではないと思うので、そこの内容ですよ。だからそこを吟味してくれるのが司書さんの役割ということですよ。
教 育	長	だから、低いところには百科事典がたくさん入っているとか、そういうものが調べ学習で大事だという学校の方針で整備して、高い本を入れているというところもあるかもしれない。だからそういうのもバランスよくなってればいいのですけどね。そういう高価な本を少しだけ買うのか、それとも子どもたちがもうしょっちゅう持って帰って読む方を多く買うのかというところもあるのだと思うのですね。
市	長	買う本は、司書さんがいれば司書さんが決めてくれるの。
教 育	長	司書が原案みたいなのを作って、あと、司書教諭、それから学校の図書委員会みたいなところで決めてく形になると思うのです。
市	長	そうですね。司書と蔵書ということですよ。やっぱり子どもたちにとって、いい場所だって思ってもらえるようにしていかないとやっぱりいけないですね。ただ本を置いているだけじゃ行かない。確かに思います。やっぱり、何かこう入口に、何か人気ランキングだとか、テーマみたいなものを書いて、そ

	<p>ういうところから違いますからね。でも一通り今司書さんは学校を回れてはいるのですよね。</p>
教 育 長	<p>巡回方式を採っているのですけれども、やっぱり数が、定期的に何曜日は誰がどこの学校とかというやり方を取れていないというか、そこまでローテーションで回らないというところなので、そういう意味で、今、2校ずつまわして、火曜と木曜はここ、月水金はここというようなローテーションで回している。</p>
市 長	<p>黒田委員がおっしゃっていた図書ボランティアというのは各校にいらっしゃるものですか。</p>
教 育 長	<p>全校ではないですね。全校ではないですけど、学校のコミュニティスクールだとか、そういう導入校なんかはかなりいろいろ地域の方々が応援で入ってやってくれる学校もありますし、あまり関わっていただいてないところもある。</p>
市 長	<p>地域差があると。ありがとうございます。</p> <p>次は、ふるさと教育、キャリア教育ですが、ふるさと教育はよくやっていたいているなと思っています。副読本も良いきだと、石川館長ですとか山川先生だとか、やっぱりいい先生方が周りにいるということもあるのですけれども、よくやっていたいているなと思っています。ちょっと最近の新聞でそのキャリア教育を小・中学校に入れていくという記事がありました。</p>
教 育 長	<p>今までも取り組んではいるのです。キャリア教育ですね。ただ、十分かというところ、ちょっと疑問点もあるのですけれども。</p>
荒 田 委 員	<p>ふるさと教育とキャリア教育ということで、コロナ禍で、3年間学校と外との行き来が少なかったのかなというふうに感じておりましたけれども、本年になってからは、3年ぶりにふるさと教育で潮音頭を学ぶ事業であったり、小樽遊覧屋形船の事業も中止されておりましたが3年ぶりに実施されたであったりとか、ふるさと教育の出前講座ということで今、山川先生の場合もありましたけども、小樽の歴史についてであったり、手宮中央小学校では観光ガイドクラブ案内人の方にお越しいただいての事業を行っていると聞いております。それからキャリア教育も、ちょっと止まっていた部分もあったのかもしれませんけども、こちらも学校に出前講座ということで、今年は地域で、お仕事されている方、小樽にゆかりのある方を学校に派遣してという事業を行っていると聞いております。外部の方に御協力いただいて学校にお越しい</p>

ただいてという事業ができるようになってきたのですが、今後は、学校から外に出ていくようなことも少しずつ充実させていければいいのかなというふうに思っております。

先日、教育委員の勉強会、視察ということで、市内の社会教育施設を訪問させていただきました。博物館、文学館・美術館、図書館にお伺いして、それぞれの施設で教育委員、教育委員会で行ったものですから、いろいろと普段、おそらく一お客さんで言ったら聞けないような施設の運営の話であったり、企画とか展示の話は非常に熱のこもったというか、思い入れという面では小樽においての文学館であったり、博物館で、今こういう展示を、小樽の歴史を考えてやっているというような、小樽への強い思い入れをすごく感じることができまして、大人が非常に感じる部分があったのですが、子どもたちの感性であれば、その説明とかも含めて展示されているものをどのように受けとめて、そしてどのように記憶に残っていくのだろうかというようなこともちょっと思いをめぐらせながら説明をお聞きして参りました。博物館には子どもたちだけでなく、大人も含めてですけれども小樽市外からもかなり多くの方が訪れておりますので、小樽市内の子どもたちがどのくらい足を運んでいるのかと疑問に思いましたし、あとそれから文学館・美術館も高校を含めて学校との繋がりがあるように聞きましたけれども、もう少し小中学校との繋がりを増やす余地があるのではないのかなということも感じて帰ってきました。副読本も用意されていて、ずっと続けて授業で勉強の教材として使っておりますけれども、それに加えて、こうした施設に赴いて、本物に触れる体験を子どもたちにしてほしいというふうに思っております。

課題としては、移動の経費の問題があって、それとスクールバスを使おうとしても、1台しかないこともあって、なかなかちょっと予約がしにくいというところと、それから学校に配分されて、予算内でどうしてもやりくりしようというふうにしている面があるので、なかなか校外活動を充実させてといっても難しいところがあるように思いますので、市内のすべての小中学校、特に地域差もあるというふうに思います。例えばですけれども、まず、博物館等の社会教育施設にすべての学校が行くなどの目的で、校外での活動、交通の経費の面とかになるのかと思いますけれども、そういったところを充実させていただければ、ふるさと教育やキャリア教育の一層の充実につながるのかなというふうに思います。

人口減少の対策という面からすると、果たしてすぐに実効性が上がるかというところではないのかもしれないのですが、様々なことを体験させてあげて、子どもの記憶に残ることができるというのが将来につながるのかなというふうに思いますので、小樽の歴史や、自分の居場所であったり、今、自分がいるというのはこういう歴史があってだったり小樽の環境はこうなんだっていうことを知ることによって、自分が将来なりたいものであった

		り、自分がどうしていったらいいのかということを考える、そういうことがキャリア教育なのかなど。働き先を具体的に決めるというのがありますけども、なぜそこにそう思ったのかということ自分で考えるようになれる、そういう体験だったり経験を子どもたちに積んでほしいなというふうに思います。私からは以上です。
市	長	校外学習費は通常の配当予算とは別枠であるのか、配当予算の中だったか。
学校教育支援室		配当予算の中です。
吉田主幹		
市	長	あとキャリア教育というと学校に会社経営者とかが来るとか、生徒さんがどこかの会社訪問に行くというカリキュラムもある。
学校教育支援室		中学校では比較的職場体験という形で、市内企業を回ったりとか。
菊野主幹		
市	長	どんなところに行っているのだろう。
学校教育支援室		銭函地区だと工場ですとか、あと場合によっては札幌にということも聞きますし、小学校ですと、それこそ小樽らしいところでいけば、かまぼこ関係については行くのもありますし、社長に来ていただいたりということは行っています。
菊野主幹		
市	長	荒田委員がお話しされたように、このふるさと教育とかキャリア教育というのは時間がかかるかもしれないけれども、人口対策にはなるような感じはしていて、特に小樽の中小企業は結構高いレベルで世界のマーケットに物を出していっているところもやっぱり少なからずあるので、何ていうか単なる職業感もそうなのだけでも、やっぱり小樽の中小企業が持っている特に製造業ですけれども、高い技術力だとか、そんなところも知ってもらえばいいなと感じています。
教 育	長	子どもたちは知らないのですよね、小樽市内の企業でどんなものを作ったり、どんな会社なのかというのはわかってなくて。
市	長	そうですねそういうのをちょっと知ってもらえば、それは以前教育部長が専門でやっていたから教育部長は詳しいとは思いますが。そういうことも職業感もそうだし、やっぱり企業がどんなものを作っているか。

教 育 長	それが大事だと思うのですよね。そういうところから魅力を感じたり、なんかのきっかけになったりというのはよくあることですよね。よく看護師さんに私はなりたいって言ったきっかけはこうだったっていうのは、実際に病院に行って感じたことからスタートするということがありますので、子どもたちにそういうものを見せていくということが必要なのではないかなと思うのです。
市 長	ありがとうございました。やっぱり若年層の定着というのが人口対策上の一番のテーマになってくると思いますので、そういった部分での効果もあるかな。これは要するに校外研修なんかの移動費がちょっと厳しいという学校があるということなのですね。
教 育 長	どうしても修学旅行だとかはもちろんなのですが、その他の校外に行くバスチャーターだとかというのは、その予算の中でやりきれないですから、当然、保護者をお願いして徴収して応援してもらおうというのが、普通の今の現状なので、そこら辺を少し応援することによって、学校もいろんな体験学習を進めることができるというところには繋がっていく。今まで受け身で来てもらったのを表に出て行って、実際に本物を見ると、博物館に行くのもそうなのですが本物を見せないと駄目かなということですね。
市 長	ありがとうございました。 それでは最後、学校のトイレですね。これは冒頭申し上げましたけれども、今教育部から、人口対策の一環として学習環境の改善という点からプランが示されておりますし、従来からの課題なので、これなかなか一遍にできませんけれども着実にやっぱり進めていかなければならない事業の一つだというふうに思っております。御発言をお願いできればと思います。
黒 田 委 員	この件も去年も私お願いさせていただきました。毎年トイレのこと、この場で出てくるということがやっぱりまだ洋式化が進んでない学校にとってトイレは本当に切実な問題なのなことなんだと思います。小樽市内には残り 10 校ほどトイレに関しての学校があるかと思うんですが。
市 長	学校のすべてってことなのですか、半分とか。全部やってないところはないのですよね。
教 育 長	はい。一つはあるのです。

黒田委員

そうです。やっぱりこのトイレ整備の問題に関しては学校や保護者からの要望が必ず毎年出てくるぐらい多いというのが現状です。それは多分綺麗で明るいトイレのほうが使い勝手がいいよねっていうレベルの希望ではないと思うんですよね。娘が入学したときもそうでしたけど、特に低学年の女の子は、和式のトイレが使えないからトイレに行くのを我慢してしまう。あと慣れてないから1人でトイレに行けない子。あとは慣れてないし、汚してしまったり、時間がかかってしまうということがあると、やっぱり次の授業の準備ができないといった子、学校のトイレが和式であるだけで健康を損なうリスクであったり、小学校の中での生活サイクルそのものが乱れるということに直結している問題なのだと思います。トイレはやっぱりすべての子どもたちが必ず使用する場所ですし、メンタル面を含めて健康を守る場所っていう考え方もできるんだと思います。学校現場はもちろんほかにも改修しなければならない箇所はすごくたくさんあると思うんですけども、やっぱり子どもたちにとって本当に切実だったり教職員からの要望が出ていたり、保護者もすごく望んでいることですので、ことのほか優先的に進めていただければと思っています。以上です。

常見委員

そのトイレのことで、私もちょっとそもそもその家庭での洋式トイレ化というのもあるので、トイレの訓練そのものが、家では98%は洋式トイレで行っているという現実があるので、実際には和式のトイレに全く慣れてないという状況があるということです。私なんか学校健診を行う立場の者でありますので、そうすると健診で脊柱、背骨、手足関節なんかも見るためにはしゃがみ込みっていうことをして、異常がないか確認するのです。いわゆる蹲踞をしてもらうのです。中にはやっぱり一定数それがうまくできない児童生徒さんがいるのです。それは発育の問題もありますし、発育に問題はなくても慣れの問題もあるのですけども実際問題としてやっぱり、しゃがめて安定した姿勢が取れないという児童生徒がやっぱりいるというのが現実にあるので、その子どもたちというのは、実際には、本来ならつかまるところがあればまだいいのですが、つかまるところもないので、結局、やはりしゃがめば転んでしまう。なので、トイレに行きたくない。便秘の原因になってしまいますし、逆にお腹を壊していると、お腹が痛いから学校に行きたくないなんて話にも発展しかねないというところがある、そういうところが一番やっぱり問題なのかなと。あと、将来的に医療的ケア児、ケアの必要な児童生徒を受け入れるというような状況になってくるときには、それこそ洋式トイレだけの問題じゃなくて、障害者用もしくは多目的トイレなんていうのも検討していかなければいけない状況にあるのではないかと、トイレに関しては考えてく必要があると思いました。

市	長	いやこれはおっしゃる通りですね。今これ出ているプランでいくと、大体1年に1校ずつくらいのペースですものね。				
教	育	長	今回は2校です。			
市	長	年に1校、多いときで2校で、トータル約6億円か。				
教	育	長	できるだけ私ども前倒しをしてやってあげたいなということで、耐震化が最優先ですけれども、その次ぐらいにトイレの整備というのも大切だというふうに思っていて、優先的にやっていく必要があるなということで、中ではいろいろと議論をしているところなのです。			
市	長	これは何の制度もないの、交付金の対象事業になっている。				
施	設	管	理	課	長	トイレ自体は国の交付金の対象事業になっています。年に何校か耐震化と合わせてトイレ改修ですとかという形でやらせていただいているほかにトイレ単独というような形で、今年もそうですけど2校ぐらいずつやらせていただいています。
市	長	毎年同じことを言われないように頑張ります。ありがとうございました。一応、あらかじめ確認している案件は以上なのですが、少し時間が経過しておりますけど、せっかくでするのでその他で何かあればどうぞ。				
黒	田	委	員	ありがとうございます。人口減少対策の話なんですけれども、市長は人口減少対策に熱心に取り組まれておりますので、私もその点すごく応援しているのですが、私自身子育て世帯の移住者として、札幌から小樽に引っ越してきて今年5年目なんですけど、この5年間で、あっ、できればお伝えしたいなということがあったので少しだけお話をさせていただきたいと思うのですが、5年前夫が協会病院のお産を再開させるということで札幌から来たのですが、そのとき周りの人たちに言われたことが、小樽いいね、小樽大好き、本当にいいまちだよねと、ほぼ100%周りから言われたのですよね。本当にみんな、小樽のことが大好きなんです。ただ同時に言われたのが、あれ子どもたち連れていくのに小樽はいい学校ないけどどうするのとか、あとは家賃が札幌より高いよねとか、地縁、血縁が強くてなかなか地域に入っていくのが大変だって聞くよとか、やっぱりそういう意味で子育てするの大変じゃない、ということ結構いろんな方面から言われたんですよね。というのは観光地としての小樽が大好きで、みんなこの魅力は知っているけれども子育てに関する情報とか、ここのまちで子育てするというイメージのない方がすごく多くて、		

まあ私自身もそんな不安を抱えながら引っ越して来て、住んでみて分かったことが、確かに子育て世代に対する支援がやはり充実しているとは言い難いと思っけていまして、例えば住宅に関してですが、私も家族もこのまちが大好きになったので永住したいなと思っけて3年前に家を購入したんですが、この私たち子育て世帯が使える支援がほぼ何もなかったというのが少しショックでした。以前帯広に住んでいて近郊のまち、例えば小学生がいる家庭が住宅土地を取得するときには、条件に応じてですが100万円から200万円の補助が出ますよとかそういう話をすごく聞っけていて、これに乗っかって、みんな結婚したらそこで家を建てよう、子どもをつくろうとなっけていた環境にあっけていたので、少しでも子育て世代に優遇される何かがあれば気持ち少し違っけたなあってそのとき思っけたのと、やはり年間2,000人ずつこれだけこう人口が減っけてきている中で、子育て世帯がここの場所だったら住みやすそうだな、ここの場所だったら便利だなと思っけてころで、土地を探したんですけどなかつたんですよ。こんなに見えるところには空き家、空き店舗がすごくあるのに、私たち世代が買っきたいというところに回っけてこない。こんな便利なところに住んでみたいと思っけたときにそこに回っけてこない。もう少し循環させる仕組みがあれば、こんな便利なところに住んでみたいと思っけて方がきっと私たち世代以外にもすごくいるんじゃないかという感覚にそのときはなりました。

あとこのまちの子育て環境というか住んでみて魅力的な面がすごくたくさんあって、幼稚園に子供を入れるというタイミングだったのですけれど、札幌だったら願書配布の2日前から親が並んで願書をもろう、それくらい大変なことだったのですけれど、小樽に来るときは電話一本でいつでもいいですよ、いつでもいらしてくださいと温かく迎えてくれる。まして、自宅まで幼稚園のバスが送り迎えしてくれる。あとお母さんが働きに出たとき子供が体調を崩したとなっけても、例えば竜宮神社にあるたつのこルームのように病児保育がある施設がある、これってすごく魅力的だと思っけてし、あと娘が小学校に通っけていますけど、人数が少ないうえにみんな親の代まで知っけている、おじいちゃんおばあちゃんの代まで知っけているっていう、何かみんなと一緒に育っけていくという感覚があるまちなのだなっけて感じました。

さっき荒田委員からもありましたが、学校教育でも、小樽のまちの体験で理解し好きになるシステムの中で子どもが育っけているという、素晴らしいことだと思っけていますし、博物館があり、美術館があり、文学館があり、子どもたちにとってまち全体がすごく生きた教科書になっけている素晴らしさがあるなっけていうふうに感じています。ですのでスポーツの話もありましたが、子ども達少年団の活動もすごい活発、習い事、文化芸能もすごく充実したまちであつたり、小児科もきちんとあるし、夫もそうですけどお産ができる施設もある。こんなに整っけていると思っけているんですね。

あとは中学校から高校に上がったとき、小樽の方たち学力のトップ層の方たちが小樽の学校に通わないで札幌に出ていくことをすごく心配していると聞くんですけど、私は逆だと思っんですよね。子どもとか家族が小樽に住み続けながらも、勉強を頑張りたい子どもが札幌の中学校を受ける、札幌の高校に入れる、スポーツをやっている子は札幌の強豪校で続けられるというすごい強みがあるので、札幌の方たちが思っているような、子どもを通わせたい学校がないから小樽に住めないよねというわけでは全然ないんだなということが実感としてありました。

こう住みづらくないのに子育ての環境に関するイメージがあまりよくないのはなぜかなと思ったときに情報が圧倒的に足りてないのかなと思いました。子育て施策は何か大きな施策をすれば子育て世代が来るかといったらそうではなく、支援は一つでも多いに越したことはないって決まってるんですけど、大事なのは小樽で子育てをするとき、今このまちにはこんな資源があるんだよと、子どもたちにはこんな教育があって、こんな体験があってこうやって育っていけるよとか、困ったときにこんなサポートがあって解決できるんだよっていうことを各分野の点とか線ではなく子育てに関する面で情報発信して知ってもらわないと、子育て世代が移り住んでくるとか若い世代が転出するということをさけるのは難しいんじゃないかなと思いました。少なくとも私が5年前に小樽に入ってくる時にはこういった情報にはたどり着けませんでしたし、それが不安感になってしまう現状はやはりあるんじゃないかなと思うので、みんな小樽が観光地なので素晴らしいまちなのは知っているからこそ、だから住んでみても魅力的なまちなんだよみたいな、こういう情報発信がもっと上手に若い世帯に伝わるといいんじゃないかなと思っていたので、すみません貴重な時間とっていただいてコメントさせていただきました。

市

長

大事な視点だったなと思っています。黒田委員からありました、やはりいい面はいい面でしっかりPRしていかないといけないですし、情報が足りない、やってはいると思うのですがやはりやり方の問題ですね。ぽつぽつぽつと行政の縦割りみたいな形でいくと伝わりにくい、委員が言われたように面的にというのは大事な視点だと思っています。

人口対策についてこれから必要となるだろうという施策については議論しています。札幌との違いが鮮明になっているものがある、保育料、放課後児童クラブの利用料、子ども医療費の無償化はだいたい札幌とほとんど同じだと思うのだけど、そういう格差をできるだけ小さく圧縮していかないといけないなと思っていますし、確かに住宅とか土地の取得の支援は今のところないんですけど、若い世代の方々と意見交換したいと、まあ必要なことだと思っていますし、黒田委員が言われた、我々も悩みどころではあるのだけど、結

構空き家がたくさんあって、いい場所にあつて、そこに住みたいという場になりうるのだけでも、進め方があまりうまくいっていないので、空き家の利活用は考えていかなければいけないなど。空き家バンクみたいのはやっているのですが、十分機能していないのでそれを見直したいと思っていますし、まあ、必ずしも行政だけでなくいいので、NPO法人でよく活動しているところもあるので、タイアップしてやっていくという方法もあるだろうなと思っていますけれども。一番のターゲットは若い子育て世代ですので、何とか若い世代の方々に定着していただく人口対策の優先順位です。これまで手稲区、西区へ若い世代の方々が転出していっている傾向が見られているが、地価が上昇し、今小樽の銭函・張碓に札幌から若い世代が移り始めている。そういう意味ではチャンスで、地価の差が札幌との間にありますので、家を建てるにしても札幌より安くできるわけですから、今のタイミングが強みだと思っていますので、どう住宅地を供給していくかということは、都市計画に関わる話ではあるのですが、都市計画も含めて利便性のいい住宅地をどう供給していくかということは行政の課題としてありますので、しっかり検討させていただければなと思っています。大変いい御意見ありがとうございます。

教育長に最後コメントをいただきたいと思います。

教 育 長

はいそれでは、今日、教育委員の日頃から思っている、ずっと言われ続けていると言った方がいいのでしょうか、その部分について思いを市長に言っただきました。この会議の中で、実は市長に大分実現をしていただいたものも、この話題に載っていないものがすごくたくさんあって、今日お話あったのは、その中でも、教育委員の皆さんはもうちょっとレベルアップが必要だねというようなところを聞いていただいたというふうに思っております。

先ほども人口減少対策の中で、いろいろな取組のことをお話されていましたが、教育の世界でも、これをやればもう来年からは大丈夫だという特効薬があるわけでもないで、教育環境の市長の公約にありますものを一つ一つ積み重ねながらやっていくことによって、実現していくものも多いと思っていますし、そういう取組がこの対策に効果が出てくるのだというふうに私も思っておりますので、ぜひ今日いろいろ教育委員の方からお話があったことについて、今後、私どもの方でも議論させていただきますので、市長よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

市 長

今日はお忙しいところどうもありがとうございました。そうですね、これから今職場の中でちょうど予算編成をしているのですよね。私が予算に臨むのは年が明けてからになるのですけれど、要望いただいた項目の一つでも、来年はなくなっているように、消えているように、またそこは頑張りたいと思

いますし、やっぱり教育は行政の中でも大事な分野だと思いますし、次の世代になってくる子どもたちに良い環境のもとで教育を施してあげればというのは、私もそれは同じ考え方です。先ほども言いましたふるさと教育なりキャリア教育などについて、小樽に愛着を持って、トータルに進んで発信して、ここで働いて安心して子育てできるような環境づくりは市の私たちの役割ですので、しっかりとこれからも教育委員会と連携しながら、まちづくりを進めていきたいと、あるいは市政を進めていきたいと思いますので、よろしくお願ひしたいというふうに思っております。今日は本当に貴重な時間どうもありがとうございました。引き続きお世話になりますが、どうぞよろしくお願ひしたいと思います。

企画政策室長

以上をもって本日の会議を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

以上